
歌の葉

黒茜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

歌の葉

【Nコード】

N0213W

【作者名】

黒茜

【あらすじ】

自作の詩を投稿していきます。

みんなの詩 うたまっぷというサイトにも同じものが掲載されています。

僕の生きる、誰かの死ぬ

ざくりと音がして

気づいたら彼の腹にはナイフ

滴る血を止めようとして手でぬぐって

寒気を感じて自分を抱きしめて

そのまま地面に真っ逆さま

どんと音が響いて

飛んでいく彼女はアスファルトに不時着

手と足が折れて千切れて

赤色を視界に収め暗闇の気配を感じて

そのまま深淵に垂直落下

僕は一人思う

世界は死に満ちている

僕は独り思う

世界が死で溢れている

空を見上げたら青色に腹が立った

ばんと音が破裂して

人々が物言わぬマネキンに早変わり

びくりと動く人もいて死んで

がくりと動かなくなる人がいて死んで

広がるしじまが心に漣をたてる

僕は一人思う

世界は悲劇に満ちている

僕は独り思う

世界が悲劇で溢れている
空を見上げたら青色にいらついた

刺されて死んだ

轢かれて死んだ

爆発で死んだ

彼は呪って逝った

彼女は刹那に消えた

人々は人生を終えた

一人の僕は思う

世界は死に満ちていると

独りの僕は思う

世界は悲劇で満ちていると

そして空を見上げ

僕は笑いながら生きていく

君に歌

始まったね

ここからは止まらないよ

動き出したね

もはや止める術はないよ

ほら未来が手を広げてまっっているぞ

始まりはいつもあやふやだ

右も左も分らない

前も後ろも分らない

だからほら近くにある手を握ってみよう

暖かくて安心できて君をきつと優しく導いてくれる

震える手に力を入れて

力の入らない足を震わせて

壁に手をついて近くの手に助けてもらって

ようやく立ち上がった君の前には

満面の笑みと柔らかない抱擁

どうだろうかここらで一度遠出をしてみないかい

優しい手を離すのは勇気があるけれど

きっと大丈夫さ後ろから慈愛の目が追いかけてくるから

ほら一歩でいいんだ

そうすれば誰かの一步と重なるから

だあれと首をかしげて

少しだけ怖くなっちゃって

後ろに一歩戻ろうかと思ったら

もう一步踏み込む誰かが手を差し出している
さあどうする
そうさそれでいいんだよ

さてさて君にも恋の季節が巡ってきた
楽しいかもしれないよ
悲しいかもしれないよ
笑って泣いて何だかぐちゃぐちゃで
誰かの気持ちに分からなくなつて
どうしようか？ どうしようね

え？ いやいやだめさ
悩む事が恥ずかしいのかい
それとも苦しむ事が辛いのかい
でもだめなんだ
悩もうよ苦しもうよ
そしたら君は君を知れる

終わりはいつも有耶無耶だ
段々霞がかかってかる
徐々に霧が立ち込めてくる
もうあまり怖くないだろう
もうそんなに恐ろしくはないだろう

君は一生懸命だったね
君は本当に精いっぱいだったね
楽しかったかい？ 分からないか
そうだねもう届いていないのかな
しょうがないかそれじゃあ
ん？ ふふそうかいありがとう

さようなら楽しかったよ
さようなら嬉しかったよ
さようなら僕も大好きだったよ
ごちそうさま またね

世界の作り

一人かい 一人だよ

僕も一人さ そうかいだから

寂しくはないかい 寂しくはあるさ

じゃあ一緒に行こうよ

じゃあ一緒に行くよ

一人かい 一人だよ

僕等は二人さ そうかいだから

苦しくはないかい 苦しい時もあるさ

なら一緒に行かないか

なら一緒に行くよ

近くの人の手を取り合って

近くの人と同じことをして

広がるのは人の輪

誰かと誰かがお近づき

はじめまして こちらこそ

一人かい 一人だよ

僕等は三人さ だからなんだい

辛くはないかい 辛くもあるな

では一緒に行かないか

では一緒に行こうか

遠くの人が手を取り合って

遠くの人と手を取り合って

作られていくのは世界の輪

誰かと誰かがご対面

こんにちわ どうぞよろしく

一人が二人に

二人が三人に

一人が少しに

少しがたくさんに

これが世界の広げ方

これが世界の作り方

一人かい 一人だよ

僕等はたくさんだ そこに入れてくれないか

寂しいのかい 寂しいんだよ

でも君とはいけないや

もう僕等はたくさんだから

歌うよ ラララ

旋律一つ ラララ

音色を奏で ラララ

体を揺らし ラララ

ふとした感情でいいから

特に理由なんてなくていいから

小さく口を開くだけでもいいから

おなかから声を出そうとしなくていいから

吐息のような ラララ

溜息のような ラララ

粉雪のような ラララ

でも喉を振り絞ってもいいんだぜ

枯らさんばかりにひたすら

潰さんばかりにめちゃくちゃ

自分の音だけで世界を埋めるのもいいもんだ

叫ぶように ラララ

壊すように ラララ

喧しくも ラララ

難しく考えずに 声を出せ

考えずにただただ 叫べ叫べ

これも歌さ それも歌だ

振動が耳に伝わって心に響けばさあ

笑いながら ラララ
泣きながら ラララ
上向いて ラララ
下向いて ラララ
繰り返せ ラララ
締めくくりも ラララ

赤色懺悔

どうもはじめまして

とはいってもみんなは僕の事を知っていますし

僕もみんなの事を知っています

これは形式で儀礼ですので

今日は皆さんに謝らなくちゃいけないんです

いきなりこんなことを言われてぽかんとするかもしれません

突拍子もない事を言われてあんぐり口をあけるかもしれません
でも僕は謝らなくてはならないのです

皆さんが争っているのは僕のせいです

誰かを憎んで殺すのは僕のせいです

何かが欲しくて盗んでしまうのは僕のせいです
ごめんなさいほんとうにごめんなさい

僕はただ一人腐り果てればよかったのです

おこがましい僕の考えが全てを狂わせました
厚かましい僕の親切が全部台無しにしました

僕は落ちた瞬間砕ければよかったのです

皆さんが殺し合うのは僕のせいです

誰かを罵るのは僕のせいです

何かにいらついて殴ってしまうのは僕のせいです
ごめんなさいここからごめんなさい

皆さんに言葉を与えたのは間違いでした

皆さんに感情を与えたのは失敗でした

皆さんに知識を与えたのは愚かでした
殴り合いますのしり合います殺し合います
僕は無知でした

ごめんなさい本当にごめんなさい
ごめんなさい心からごめんなさい
ごめんなさい手遅れでごめんなさい
ごめんなさい後の祭りでごめんなさい

羅列するは心

入道雲に乗る夢を見よう

ふわふわでもくもくできつと跳ねる

子供っぽいと笑う人もいるかもしれないけれど
楽しいから行こうよ

目を閉じればそこにあるから

夢に逃れ現実を捨てる

弱者の非建設的な下らない行動

だからなんだよ

それでも僕はここに居たくないんだ

逃げるさどこまでも

駆けるんだいつまでも

振り返ったら誰もいなかった

振り向いたら誰もいなかった

ほら見た事かと声がする

そら見た事かと声がする

入道雲の上で遊んでいたら

端からどんどん消えていった

気が付いたら僕の周りには何もなかった

おいおいとかぶりを振って笑った

これは現実と何が違うんだ

そうさ僕にはだれもいなかった

そうだ僕にはだれもいなかった

ほら同じじゃないか

そら変わらないじゃないか

夢見る前も夢見た後も一緒一緒
僕に居場所はない

夢見る前も夢見た後も変化なし
僕にはだれもない

空洞だがらんどうだからっばだ

ここにもそこにも誰も彼も

僕はいない僕がいらない

僕を見ない僕は見えない

何もかもあれもそれもこれも

現実も夢でした

死にたい生きる

墨汁色の心象風景

腐敗した性根が歪に笑う

明日は来るさ 今日と変わらず
今日も来たよ 昨日と変わらず

五月雨が濡らす世界

ねじ曲がった視界は心の現れ

鼓動は続くさ 今日と変わらず
鼓動は続くよ 昨日と変わらず

どうか僕を殺してください
殺して助けて救って殺して
変わらなくて辛いんだ
変えられなくて辛いんだ

閉塞感僕を殺す

伸ばした手は弾かれ垂直落下
明日死のう 今日生きる
今日は生きた 昨日死ねない

どうか僕を殺してください
殺して助けて救って殺して
手を伸ばしたら弾かれた
手を伸ばすから弾かれた

僕は死にたい
明日死にたい 今日生きる

僕は消えたい

明日消えたい 今日消えない

僕は死ねない

未来死にたい 今生きる

そうやって僕は生きている

どうか僕を殺してください

殺して助けて救って殺して

死にたいけれど生きる

死にたくても僕は生きる

誰が為、僕の為

さし障りのない言葉で慰める
当たり障りのない言葉で憐れむ
だってあなたに何の感情も抱いてないから
求めている言葉をかけるよ
あなたの望むがままに

傷つかないように優しく触れる
悲しまないように柔らかくほほ笑む
だってあなたに何一つ興味持っていないから
求められている通りに動くよ
あなたの思うがままに

心はいつも寒々しいほどに静寂
あなたにかけた言葉など覚えていない
心はいつも寒々しいほどの沈黙
あなたの為の行動なんて一つもない

誰かと分かり合う事なんてきつと出来ない
隣人を愛す事などおそらく出来ない
誰の言葉も誰の声も僕の心に届かず落ちる
そもそも僕に心はるのか
そもそも僕は心を持つのか

心はいつも狂おしいほどに皆無
誰かにかけた言葉は全てが偽り
心は今日も狂おしいほどの空っぽ
誰かの為に動かない動けない

神様の来週末

どうやら彼は明日死ぬ

交通事故さ バラバラだよかわいそうに
どうして分かるのかって

そりゃあ私は神様ですから

死神っていうじゃないですか

あれ私の別名なんですよ

作ったのが私ですから壊すのも私なんです
生かすのが私だから殺すのも私なんです
きたる終末に向けての準備もあるのに
気が滅入ります 大変ですよ

明日はいつもよりたくさん死ぬみたいです
全くまた戦争ですか

どうやらまた戦争ですか
いつまでも学習しませんね
いつになったら賢くなるのか

何人死んでも廻らすだけです
何人死んでも繰り返すだけです
疲れるんですよそれでも
疲れるんですよそれでも

死を看取るのも私の仕事
生に送り出すのも私の仕事
七日で作った報いでしょうか
七日で作った代償ですか

いいなあ あなた方は死ねて
いいなあ あなた方は終れて
私は今日も死を看取り生を作る
惰性ですよ ただの流れ作業です
惰性ですよ 片手間で見てもいない

そろそろこの世界も終わり
また失敗でしたと日記に記載
来週末にあなた方は消滅
今回も失敗でしたと手帳に記述

失敗作よさようなら
不良品よさようなら
来週末の終末でさようなら

コトクリ

難しい言葉を使うのが好き

ひねくれた言い回しをするのが好き

耳慣れた言葉は嫌い

お決まりの文句は嫌い

僕はコトクリ

けれども理解はされたい

されども共感は得たい

難しい言葉の先を見てほしい

ひねくれを直線に直してほしい

僕はコトクリ

馬鹿みたいだとたまに思うさ

シンプルに伝えたいと思うさ

ストレートに言いたいと思うさ

だってそれが一番だから きつとそれが核心だから

それでもコトクリ 僕はコトクリ

言葉で塗り固めた道に行く

至る所に穴が開いて

足をとられ躓くけれど

それでも言葉の先を見てみたいから

僕はコトクリ

そこに何か待っているのだろう

きつと何も待っていないのだろう

下らない言葉遊び馬鹿みたいだ

気がつけば言葉をこねくりまわして 意味はなく価値もない
だけれどコトクリ 僕はコトクリ

死ぬまで遊び続けるさ

息絶えるまで遊び続けるさ

だからコトクリ ゆえにコトクリ
僕がコトクリ

そら、空

空

青く広がる姿が好きだ

白く染められた姿も好きさ

そら

笑顔で生きればいいんだ

笑って過ごすのがいいさ

空

終わりと始まりの間

赤く色づく姿が綺麗だ

そら

偶には泣けばいいさ

時には声を出して叫ぼうか

空を眺め生きている

空の下で生きている

そら今日は幸せだ

そら明日も幸せさ

空

漆黒で僕等を包みこむ

見なくていいと優しく囁く

そら

独りぼっちになった気で

今日も人を遠ざけるのかい

空を見つめ死んでいく

空の下で死んでいく
そら君は泣いている
そら君を泣かせてる

空の下 僕は始まり
空の下 僕は終わる
空の上 君を見る
空の上 君と会う

空を眺め生きてきた
空を見つめ死んで来た
そら手を繋ぎ笑おうよ
ほら僕は空の下も上も

夏色の光と花と風と心

木々のざわめき 揺らぐ木漏れ日

乱舞する花弁 あたり一面色彩塗れ

吹きすさぶ風 初夏の匂いが刹那で充満

きらめくのは光か心か

揺らめくのは花か心か

ざわめくのは木々か心か

降りかかる熱色の光 世界が赤く熱を持つ

咲き誇る花一輪 情熱色に身を染める

四季の便りを伝える風 南から熱を伴って

騒がしくは夏か心か

夏 色づくは花か心か

熱伴うは風か心か

降り注ぐ 差し込む 光が爛々

咲き誇り 咲き乱れる 花が繚乱

吹きすさぶ 吹きゆく 風は夏色

燃え上がれ夏よ心よ

湧き上がれ夏よ心よ

舞い上がれ夏よ心よ

恋愛スパイラル

愛していますと言われると
思わず笑ってしまうんです
何だか滑稽で 馬鹿みたいで
笑いを堪えるのに必死です

臆面もなく言い切る好き
恥ずかしげもなく吐く愛の言葉
その薄っぺらさに驚きます
その軽々しさに呆れます

愛を売ります
こちらの好きは安いです
こちらの愛は高いです
それは十円 これは百円

大好きだとか言われると
大好きだと言ってみます
もちろん嘘で 出鱈目です
ただの反芻に過ぎません

乱立する恋色エピソード
あちらこちらの劇的悲恋
歩けば恋に出くわします
三步で運命感じます

恋を買います
幸せな恋はありますか

悲しい恋でもいいけれど
それは一年　これは一月

愛だの恋だの語ってみよう
世界は愛に満ちている
愛だの恋だの歌ってみよう
世界は恋で溢れている

恋愛を始めます
愛していますと言います
大好きだとのたまいます
そして終わり　次に行くのです

最上の最後

階段を上る

朽ちかけの足元はぎしぎし
僕の心の様に悲鳴を上げる

階段を上る

未だ見えない終りの景色
心は巻き戻しを願っている

僕は生れ　僕は死ぬ

生物の定め　生命の約束
けれども願う　生きていたいと

階段を上る

振り返れば始まりが見えない
心は何故か目を背け続けてる

僕は生れ　僕は死ぬ

それが掟　それが必定
けれども思う　死にたくないと

此処はどこかと振り返り

遙か昔の始まりを笑う
そろそろ此処がと振り向いて

其処で待つ終わりを笑う

僕は生れ　僕は死ぬ

それが命　だから人生

結局笑っ 楽しかったと

人死に横丁

ようこそ　ここは人死に横丁
人間の欲望たつぷりの
馬鹿と馬鹿と馬鹿の樂園
あちらこちらに散らばる死体
それもまた日常です

おやおや　ここは人死に横丁
下衆な人間押し込めた
クズとクズとクズの居住区
殺し殺され広がる赤色
何故にいまさら後ずさり

馬鹿に生きる価値などありません
だから馬鹿と言われるのです
クズに生きる場所などありません
だからここに着いたのでしょうか
ここは人死に横丁　ゴミ箱掃き溜め

やれやれ　ここは人死に横丁
明日の来ない深淵の奥底
馬鹿とクズとカスの最果て
いまさら戻る場所などなく
それでも抗うのは何故

此処は希望のない場所ですよ
だからあなたは死になさい
此処は終った場所ですよ

だからあなたは死ぬのです

ここは人死に横丁 終わり終わり

人死に横丁 救われない

人死に横丁 希望もない

人死に横丁 戻れない

ようこそ ここは人死に横丁

人生の渦

手を伸ばした先にいるのは君か僕か
そんな簡単なことすら簡単でなくなる今日この頃
モラトリアムなんてとうの昔に過ぎ去ったというのに
いやはや僕は子供なのか大人なのか

振り返った其処は振り向いた此処は
どうですか分かりますか
そこは未来ですか
ここは過去ですか
此方ですか彼方ですか

分かりませんか分かりませんよね
知っていますよ期待していませんよ
僕はあなたと違う
あなたは僕と違う
それだけは分かりまがね

最後に浮かべるのは笑みか涙か
そんな先の事を考える日々の連続
死にたがりのように思われるけれど違います
そもそも僕は生きているのか

渡ろうとする其処渡りきった此処
どうですか分かりますか
其処が終わりですか
此処も終わりですか
彼方ですか此方ですか

下らないですか下らないですよね
知っていますよく言われますから
けれど どうでしょう
されど どうでしょう
人生ってそんなもんで

答えの出ない自問自答をして
下らない思いつきに悩んで
今日も明日も もやもやしてる
正解なんて一つもなく
僕等はすべからく間違っている
だから面白いのか
だからつまらないのか

明日も未来も

明日があるさとのたまえば
今日はもう見ないで済む

今日の悲劇は 明日の喜劇
目をそらせばないのと同じ

明日があるよと言いつつが
今日はどうなのと言いつつ
今日の現実 は 明日の過去
前を向けば見えないないない

明日に視線を向ければ幸福
未来に思いを馳せば希望色
目を逸らしますよ 辛いので
前を向きますよ 悲しいので

明日があるさと誰かが言う
今日はないのと誰かが言う
今日はないよ 明日があるのに
なかった事になるのさ 明日で

明日はきつ々と思つて幸福
未来はきつ々として願つて薔薇色
ありませんよ 明日なんて
知ってますよ 未来なんて

明日も僕は僕のまま
今日の僕も僕のまま

昨日からそうでした
昔からそうでした
最初からそうでした

明日はないと知って絶叫
未来は来ないと知って絶望
でもあるさ 明日はあるさ
明日はあるさ 今日と同じく

腐った白

泥まみれで笑ったあの日
僕等はただひたすら幸せだった
振り向く後ろなどありはせず
振り返る過去などありもせず

心は未だ白いままだった
知りたくもない黒を知り
嘘だらけの白を知り
灰色を知った今では遠く彼方

戻りたくて戻りたくて
何も知らずにいたくて
何も見ずに過ごしたくて
僕は蹲り耳塞ぎ目を閉じた

未来に焦がれたあの頃
僕等は無知でいる事を許されていた
世界の無残を知る事はなく
世界の悲惨を見る事もなく

心は濁らず澄んでいた
蔓延る欲に侵され
体裁だけの善を学び
淀んだここでは見えないいつか

帰りたくて帰りたくて
ただ笑いたいだけで

笑って生きていただけで
それでも流れる涙は止まらず落ちた

汚れたのはいつだったか
腐ったのはいつだったか
大人になれば分かる事とは
分かりたくない事だった皮肉

けれども進みたくて
未だ未来に焦がれて
それでも広がる世界を知りたくて
汚れ濁ったまま明日を迎えにいくよ

ヒーロー

僕はヒーロー 誰より強い
僕はヒーロー 何より強い
悪は挫くよ徹底的に
正義を貫くよ信念だから

しかしヒーローとかける声
君の正義は一方通行
押しつけがましい自己満足
君なんて誰も求めやしない
君なんかに居場所はない

君の何が強いのか
僕は心が強いのだ
心のに何の意味がるのか
心にこそ価値があるのだ
それで救われる世界かい
それで救われる世界さ

しかしヒーロー 心は無意味
しかしヒーロー 心は無価値
悪は挫けないいつまでも
正義は貫けない信念ごときで

それでも僕はと確かな声音
例え心が弱くとも
僕の信念が認められなくても
ヒーローだと一人言い張るのさ

ヒーローだと一人胸を張るのさ

君は正義を知らないのか
裏返せば悪に変わった

君の心はそれほど弱いのか
とうの昔に砕けて散った

じゃあ僕が君を救うよ
それはなんとも素敵な皮肉

僕はヒーロー 誰より強く

僕はヒーロー 何より強く
救いに行くよ今すぐに

手を差し伸べるよ信念が故に

ヒーローだった かつての僕は

ヒーローだった いつかの僕は
かつての僕よすぐ分かる

信念掲げいつかの僕が会いにくる

銃声響き倒れた彼女

響く銃声 打ち抜かれた頭
崩れ落ちる最愛の人を受け止め
声を上げ男は泣いた
喉を枯らし男は泣いた

全ての思い出には彼女がいて
全ての幸せには彼女とともに
まるで世界がスイッチを切ったよう
見えない足元見渡せない景色
帳が落ちた今まさに

男の泣き声遥か遠く
男の泣き声響く響く
右腕に感じる彼女の重み
酷く重いそれが死の重み

おお神よ ひたすらに祈る声
返ってきた沈黙を受け止め
男は叫び泣いた
もはや声は出なかった

いつでもそこに彼女がいて
いつでも彼女がそこにいた
これぞまさに世界の終わり
遠い始まりすぐそこに終わり
エピソードが今まさに

男の叫びは枯れていく
男の叫びは消えていく
気が狂ったか男は笑う
泣き叫ぶように男は笑う

彼女を置いて 男は狂う
髪振り乱し 机蹴飛ばし
右手に花瓶 投げて粉碎
右手で窓を 殴って割って
右手が血で 濡れて真っ赤

男は蹲り泣いた
男は蹲り笑った

左手に感じる罪悪の重み
酷く重いそれは銃の重み

首なし勇者

首なし勇者よどこへ行く
そちらが正義の道筋か
そちらに悪が蔓延るか
失くした視界でどこを見る

首なし勇者よ何故に行く
そこは悲劇の真ん中だ
そこは絶望の中心地だ
失くした視界で見えるものか

心は汚れなき潔白
信念掲げ悪を討ち
信念が為人を救う
けれども勇者　されども勇者
お前は報われるのか

首なし勇者よ何を見る
そこにあるのは人の顔
そこにあるのは歪な笑顔
失くした視界で見えるそれは

心は翳りなき純白
信念ゆえに殺した悪
信念貫き助けた人
けれども勇者　されども勇者
お前は救われるのか

失くした視界の先に

見える人々の笑顔

失くした首を持つ

救った人々の笑顔

それが報いか　これが救いか

首なし勇者よ何故笑う

救った人間に恐れられ

助けた人間に殺されて

失くした視界で見ただろう

失くした首で知っただろう

首なし勇者よどこへ行く

首なし勇者よ何故に行く

首なし勇者よ何を見る

首なし勇者よ何故笑う

首なし勇者よ何故泣かぬ

嘘、嘘、嘘

僕等はいつも嘘塗れ

吸って吐いてみたいに当たり前

心臓の鼓動の様に無意識

世界は嘘の掃き溜めで

嘘の掃き溜めが世界

それに気づかぬ偽善者たちは
したり顔で僕等を責める

嘘をつくのはいけない事だと
そこに孕む矛盾に気づかず

嘘をつくのが日常で

日常は嘘があって成り立っている
嘘をつくのが友達で

友情は嘘があって保たれている

それを認めぬと言うならば
本音で過ごしてみれば良い
それを認めぬと言うならば
本音で話してみれば良い

まるで積木崩しのように
いとも容易く崩れるから
あたかも砂上の楼閣の様に
あっという間に無くなってしまうから

幾つになっても嘘と僕

切っても切れぬ嘘と僕
虚構に祈りをささげ
嘘つきに憧憬を抱く

明日も世界は嘘一色
未来の世界は嘘塗れ
心はいつも嘘とともに
僕等はいつも嘘とともに

幽霊さん

子供だったあの頃

いないはずのものが見えた
それは父さんがいない時に
ふっと現れ遊んでくれた

幽霊さん 幽霊さん

家の前でボール遊び

少し遠くに蹴って追いかけて
一人遊びに飽きた時に
ほんとボールを蹴ってくれた

幽霊さん 幽霊さん

その顔はなんだか悲しげで

幼い僕が大丈夫と問えば

大丈夫だよと笑い返す

幽霊さん 今は見えない

幽霊さん もういない

母親求め泣いていた

無性に寂しく涙流した

知らないぬくもり頭に感じ

見上げたそこに笑顔があつた

幽霊さん 幽霊さん

いつだったか憶えていないけれど

お弁当を作ってくれた

おいしいと僕が言えば

ただ頷き笑っていた

幽霊さん 今は見えない

幽霊さん もういない

子供だったあの頃

いないはずのものが見えた

父さんには言えないけれど

今でもはつきり覚えてる

ねえ母さん ねえ母さん

天邪鬼

はいはい僕等は天邪鬼
ひねくれひねくれ心がねじれ
普通だねって言われると
無性に腹が立つんです

でも僕等は天邪鬼
歪で歪で心は真っ黒
天邪鬼って言われると
不思議と違うと言うのです

はいはいはいはい天邪鬼
嘘つき 嘘つき 偶には本音
はいはいはいはい天邪鬼
皮肉屋 皮肉屋 時折感動
僕の名前は天邪鬼
またの名前は一般人

そうそう僕等は天邪鬼
あつちでこつちで心を隠す
口から出てくる言葉は全部
建前 嘘嘘 おべんちゃら

はいはいはいはい天邪鬼
説教 説教 全部忘れる
はいはいはいはい天邪鬼
感動 感動 心は爆笑
僕の名前は天邪鬼

またの名前は人類です

泣いているけど嘘泣きです
笑っちゃいるけど作ってます
怒っていますけど全部嘘
やる事なす事全部嘘
だって天邪鬼なんですもん

はいはいはいはい天邪鬼
なんや かんや 言われます
はいはいはいはい天邪鬼
でもでも でもでも 響きません
僕の名前は天邪鬼
またの名前は人間 人間

能無し声在り

ギターが奏でる旋律に
踊る心を声に変えて
空気を震わし耳へと運ぶ
それが役割 ボーカルです

ベースが響かす鼓動に
跳ねる心臓リンクして
たまにアレンジ加えます
それが楽しい ボーカルです

歌うことしか出来ません
ギターなんて弾けません
ベースも全然弾けません
能無し能無しボーカルです

ドラムが鳴らす轟音と
リズム教えるドンドンドン
早めのピッチを直します
さりげなくね 一拍遅らせ

歌うことしか出来ません
ドラムなんて叩けません
スティックすっぱ抜けました
声だし声だしボーカルです

曲に合わせてビブラート
早く 細かく 緩やか 遅く

場面場面で調子を変えます

喉をあけたり絞ったり

叫びのような 声声声

吐息のような 声声声

歌う事しか出来ません

ギターを弾けない能無しです

ベースを弾けない能無しです

ドラム叩けない能無しです

声だけ在ります ボーカルです

四か五か

四捨五入したら好きですが
四捨五入したら嫌いです
好きが四で 嫌いが五
そんな些細な違いでさあ
好いたり嫌ったり 馬鹿みたい

四捨五入すれば正しいです
四捨五入すれば間違いです
正義の四と 悪の五
そんな小さな違いでね
褒められ貶され 滑稽ですよ

それでも手を伸ばすしかないのです
求め掴み取るしかないのです
敗者になりたくないのなら
勝者でありたいと願うなら
四捨五入の社会さ世界さ

四捨五入すれば生き残り
四捨五入したら即死にます
生存四で 死亡が五
そんな微かな違いでも
生きたり死んだり 軽々しく

ならばと足掻きもがきましょう
しからは最後の最後まで
死にたく何かないでしょう

生きていたいと思うでしょう
四捨五入の人生を一生を

世界の知り方

比べ比べて自分知る

あの人があそこにいるから距離を知る

この人がここいるから高さを知る

比較して位置を知る距離を知る高さを知る

一人でも生きていけるけれど

一人だと何も分からない

比べ比べて幸せ知る

あの人が不幸だから幸せを知り

この人が幸福だから程度を知る

比較して程度知る反対を知る密度を知る

一人でも生きていけるけれど

一人だと何も分からない

ここはどこ？　ここはあそこ　あそこはそこ

つまりつまりは　ここはそこ

そうやって僕等は世界を知っていく

比較比較で知っていく

比べ比べて心知る

あの人が泣いているから笑顔知る

あの人が笑っているから涙知る

比較して喜びを知る憎しみを知る嬉しさを知る

一人では生きていけるけれど

一人では何も分からない

ここはどこ？　ここはあそこ　あそこはそこ

つまりつまりは　ここはそこ
そうやって僕等は世界を知っていく
比較比較で知っていく

僕の軽さ、言葉の軽さ

大きな言葉で言いたがる
大きな括りで言いたがる
誰にも当てはまるように
誰もが頷くように

世界とかよく使いたがる
人類とかよく言いたがる
誰でも分かるように
誰もが首肯するように

その言葉のなんて薄っぺらいことだろう
その言葉は響かない 誰の心も動かない
その言葉のなんて軽いことだろう
その言葉は届かない 誰の心が動くのか

感動してもらいたい
共感してもらいたい
誰かではなくてあなたに
誰かではなく君に

笑ってもらいたい
悲しんでもらいたい
思わず笑顔がこぼれるような
気づけば涙が伝うような

この言葉に厚みを持たせたいんだ
この言葉で響くよう あなたのが動くよう

この言葉に重みを加えたいんだ
この言葉で届くよう 君の心を動かしたくて

反逆者の唄

拳を振りかぶれ

今までの弱い自分と

冷徹な傍観者の顔面に

反逆の誓いこめて殴れ殴れ殴れ

蹲り耳を塞ぎ眼を閉じたのは

自分の弱さを知りたくないから

世界の残酷に負けてしまうから

けれども知っていた分かっていた

どんなに硬い殻被っても

中にいる自分の弱さを知っていた

意味がないと分かっていた だから

大きな旗を翻せ

硬い殻突き破るように

世界の無残に見せつける

反逆の旗掲げ一人立ち上げれ

自分の弱さ知りながら

立ち上がる者こそ何より強い

世界の悲惨知りながら

立ち向かう者こそ何より強い

反逆を始める

全ての弱さを受け入れて

強く在りたいとそう願う

世界の凄惨知りながら
それでも一人立ち向かう
勝^{かち}関^{どき}あげるその日まで

齒車の幸せ

齒車は今日も回る回る
小さな小さなその体
年重ね摩耗したその体
それでも齒車でいられる
その幸せに笑った

齒車の一つ 部品の一つ
そんな小さな存在でしかない
愚か者によく言われたけれども
彼らはまだ気づいていない

齒車でいられる事の幸福を
部品に選ばれる事の幸運を
彼らはまだ気づいていない
齒車にも部品にもなれない
何の価値もない絶望に

齒車は今日も回る回る
世界を動かす一つだと
小さな誇りをその胸に
それゆえ齒車でいられる
その幸せに笑った

齒車の一つ 部品の一つ
それでも世界と繋がっていて
それでも世界を動かしている
愚か者はまだ気付かない

齒車ですらないという不幸を
部品にすらなれない事の悲劇を
自分に何の価値もなく
生きている意味すらない
独りぼっちの現実に

齒車は今日も回る回る
カチリと動く音の一つが
誰かの為の音であること
いつか齒車が替わるまで
その幸せに笑う

知らない見えない聞いてない

平等なんて嘘だつて

とつくの昔に気づいてる

僕等はそんなに馬鹿じゃない

金持ちがいて貧乏がいて

幸せ者がいて不幸があつて

命の価値は平等と

いまだき誰が信じてる

僕等はそんなに出来てない

知り合いより肉親で

他人より知り合いで

けれども僕等は声高に

平等なんだと言うのです

テレビの中で飢えてる子供

テレビの外で食べ残し

世界も命もあの子も僕等も

平等に生きています

平和何てないのだと

いまさら言われなくても

僕等は随分前から現実見てます

どっかの国で戦争してる

近所の人殺された

それでも僕等は笑ってます

平和だからと笑ってます

テレビの中で悲鳴がして
テレビの外で悲鳴がして
今日も明日も明後日も
平和に生きています

欺瞞欺瞞の積み重ね
矛盾矛盾の人生です
知っているけど知らないふり
理解してます分かりません

人間で中々凄いことを
実は結構知りません
惨いばかりの現実を
嘘を吐き 目を逸らし
夢物語を 絵空事を
分かっていながら信じるのだから

それでも笑って生きるのです

幸福論者になりましょう

夢物語に浸りましょう

絵空事で笑いましょう

綺麗事を誇りましょう

厳しくて辛くて打ちのめされて
汚れて泥まみれになって真っ黒で
足がくがくで震えて立てなくて
心痛くて苦しくて泣きそうでも

希望に手を伸ばしましょう

期待に胸膨らませましょう

未来に心弾ませましょう

顔に笑み浮かべましょう

綺麗事じゃ生きれない場所で世界で
絶望に足とられ引つ張られ倒され
見えるのは暗闇で夜で漆黒で
生き辛くて死にたくてそれでも

僕の心は壊れません

彼の心も曇りません

彼女の心は晴れ渡り

誰の心も澄んでます

あり得ない事でも嘘みたいでも
現実味無くつても見つからなくても

例えこれが戯言だったとしても
それでも

世界は美しいと言います
世界は楽しいと叫びます
世界は綺麗だと眩きます
世界は最高だと笑います

幸せの唄

おじいちゃんちの縁側で
少し震える手で持ってきた
氷の入ったグラスと缶ビール
大人になったと笑っていた
年とつたねと言い返し
静かな庭に一つ音落ちた

一人ぶらりと散歩して
目の前駆けてく子供たち
じゃれついてくる首輪の付いた犬
十円玉が落ちてたら今ならきつと
お届けしますと笑いながら
日常ぶらぶら歩んでる

劇的な変化がなくても
感じる事が出来るもの
小さくてたまに見えない
でもきつと凄く近くで
僕等を笑顔にしてくれる

何の変哲もない日々の中
僕は退屈を感じていたけれど
いつからだったかどこでだか
それを悪くないと笑えるように
それが良いと思えるように
日常が愛しいと知った

きっとそれは外にあつて
きつとそれは中にあつて
宝石の様には輝かず
仄かな明かりを灯してる

その言葉は短く一言
ただ口にするのは無粋だから
心で思つていればいい
心で思つて知らずに浮かぶ
笑顔に気づいてまた笑おう

人が願う、心に願う

まるで全てを包むように
壮大で果てしない空は
誰かの為の青じゃなく
誰かの為の赤じゃなく
ただ色を変えるだけ

意味求めるも変哲のない青
勝手に心が澄んだように
勘違いして笑っている
心震わすも時間通りの赤
まるで宝石のように
有難がつて笑ってる

空に顔なく 心なく
人に顔あり 心あり
空に声なく 体なく
人に声あり 体あり

例え空に響くのが
幸せの声だろうが
絶望の悲鳴だろうが
何かを返す事もなく
ただ虚しく響くだけ

ただ一つ残る終わりの黒
それはただ隠しているだけで
何も変わらず全ては残る

動かすのも変わるのも人間

全ての始まり作るのも

全ての終わり作るのも

空に顔なく 心なく

人に顔あり 心あり

空に声なく 体なく

人に声あり 体あり

空白

明日世界が終わるなら
僕は何がしたいだろう
何をしようと思うのだろう
ふと考えて はたと気づく

ずっと続いた人生で
僕は何をしたのだろう
何をしてきたのだろう
あれと首傾げ そうかと気づく

何もししていなかった人生で
何もしようとしないう人生
明日世界が終るとしても
何もしないまま終わる人生

惰性で生きてきたようです
無駄に生きてきたようです
意味求めるも 何もなく
価値求めるも 何もなく
広がる空白が虚しくて

それでも何かしようと
思わない辺り 僕は
もしかしてこの人生を
少しばかり 気に入ってるのか
だとすればそれもまた

一つの価値と 意味を
持つんじゃないだろうか
惰性でなく 無駄でなく

何もししていなかった人生で
何もしようとしないう人生
明日世界が終るとしても
何もしないまま終わる人生

惰性で生きてきたけれど
無駄に生きてきたけれど
意味求めたら 何かあった
価値求めたら 何かあった
広がる空白が愛しくて

明日世界が終るとしても
僕は胸を張ってしよう
別に何かしようともせず
この空白を 誇りながら

明日も世界は続くけれど

曖昧領域

正解ですかどうですか
いいえ正解じゃないですよ
間違いですかどうですか
いいえ間違いじゃないですよ
その真ん中です妥協点

この色なんです黒ですか
いいえそれは黒じゃないです
この色なんです白ですか
いいえそれは白じゃないです
それらを混ぜた灰色です

とりあえずで流しましょう
何となくで誤魔化しましょう

結論 回答 先送り

曖昧領域広げましょう
曖昧領域包みましょう

もしやあなたは聖人ですか
聖人なんておこがましい
もしやあなたは悪人ですか
悪人なんてとんでもない
スタンダードな人間です

あなたは私が好きですか
いいいえそんなお恥ずかしい
あなたは私が嫌いですか

いやいやまさかそんな事
どっちも零です普通です

もしかしたらと予防線

多分恐らく ほかします

即答 断言 あり得ない

曖昧領域広げます

曖昧領域包みます

言い訳賛歌

もう駄目だと弱音はく
振り絞ればまだあるが
そんな頑張りたくはない
いまだ無知を晒している

知らないからと弱音はく
言い訳がましいと言うが
分かっている言い訳だ
いまだ無知でいたいから

本気で頑張る美徳は知ってる
全力疾走の素晴らしさ知ってる
それでももし全力で走って
何もなかった時の絶望を
知りたくないから今日も無知

本気になれない年代で
全力できない年頃で
言い訳がましくそのままで
いまだ無知で生きている

おおそ予想は出来ていて
大体の結果は見えていて
意地汚くしがみついている
無知のまま今日も明日も

本気で生きる恐ろしさ

全力疾走の向こう側
僕に何かあるかの証明は
何もない事の結果を
知ってしまう事の恐怖に繋がる

無知を罪というのなら
全力の褒美は何なのか
無知で罰を食らうなら
本気の恩賞何なのか
知りたいけれどいまだ無知
恐ろしいから今も無知

死にがい

無為に過ごす日常が
いつもの僕で通常です
惰性と怠惰に塗れながら
前へと進まず停滞してます

生きがい探して生きてます
生きている事を迷わず
生きている事を悩まず
生きていたいと思えるように
生きがい探して生きてます

無駄と思えた日常が
いつもの僕の通常です
目標と目的を見失い
方向決めず止まってます

死にがい探して生きています
死んだ時に誇れるよう
死んだ時に笑えるよう
死にたくなと思うように
死にがい探して生きています

生きがいなくとも死ぬだけで
過ぎていく日常を見送り
いつの間にか死が迎えに来る
死にがいなくとも生きるだけで
日々は滞る事なく流れ

いつもどおり生を消費する

それでも

生きがい探して生きています

生きている事に迷っても

生きている事に悩んでも

死にたくなйと思えるように

死にがい探して生きています

優しい世界でありますように

出来る事は祈る事

出来ない事は多すぎて

世界を変える 出来ない

世界を救う 出来ない

人が人を助けるような

誰かの幸せ笑えるような

誰かに手差し伸べるような

世界であるよう願っている

出来る事は祈る事

優しい世界でありますように

出来る事は願う事

優しい世界でありますように

出来る事は願う事

出来ない事がありすぎて

皆が幸せ 出来ない

皆が泣かない 出来ない

手と手を取り合える

自分と手を繋ぐ誰かの

手がまた誰かと繋がる

世界であるよう祈ってる

出来る事は祈る事

優しい世界でありますように

出来る事は願う事

優しい世界でありますように

悲しい世界であるけれど

優しい世界でありますように

厳しい世界であるけれど

優しい世界でありますように

祈りを胸に願いを心に

優しい世界でありますように

正義と悪魔と男

正義の味方に歓声を
私の敵を倒してくれた
僕の敵を取ってくれた
俺の子供を助けてくれた

悪魔の使者に呪いあれ
私の夫を肉の塊に
僕の母を二つに裂いた
俺の子供を血祭りに

泣いてる女 笑う女
走り回る子供 物言わぬ子供
喜ぶ男 男の絶叫

正義の味方を方向変えて
横から覗きこんだら 悪魔 悪魔
悪魔の使者を立場を変えて
後ろから見れば 正義 正義

男は仲間と祝杯を
誰か殺して奪った金で
誰か救ってもらった金で
この一杯の為だけの金で

救った人間 金の為
殺した人間 金の為
酒の為 金の為

正義の味方を方向変えて
横から覗きこんだら ただの男
悪魔の使者を立場を変えて
後ろから見てみたら ただの男

方向変えれば正義の味方
立場を変えれば悪魔の使者
男にとっては金の為

正義の味方を方向変えて
横から覗きこんだら 悪魔 悪魔
悪魔の使者を立場を変えて
後ろから見てみたら 正義 正義
ただの男は祝杯あげて
仲間と笑いながら言う 金になった

名称 化物

名称 化物

僕が歩けば石が飛ぶ

罵声と敵意の石が飛ぶ

裏側覗けば恐怖があつた

名称 化物

僕の居場所はどこにもない

あつちは迫害こつちは忌避

どこにいても違いはなかった

名称 化物

皆が呼ぶから化物化物

いつから成つたか化物化物

明日もきつと化物化物

他称 化物

僕の声は届かない

僕に手は差し出されない

涙が落ちて 足を止めた

他称 化物

助けてくれに死んでしまえ

伸ばした手に返答の殴打

心はとうに 冷え切っていた

他称 化物

違いがあるから化物化物

人と違うから化物化物
今日も変わらず化物化物

それでも僕は自称する
化物じゃないと叫び続ける
僕の名前は人間です

自称 人間
一人だけ言い続けて
喉が枯れ声でなくなっても
人間だと自称する

自称 人間
僕の名前は人間です
自称 人間
僕の名前は人間です

一匹狼と月

荒野を駆ける 一匹狼
今日も遠吠え空に向かつて
呼びかける仲間はいないが
浮かぶ月は聞いていた

夜と狼照らす 月
今日も偽物の光で輝いて
いつもの狼を見ていた
東から本物が訪れるまで

一匹狼空を見る
輝く月が好きだった
偽物の光放つ月
駆ける狼憧れた

荒野を駆ける 一匹狼
今日もいつものように遠吠え
呼びかける仲間はいないが
渴いた銃声轟いた

本物隠れ浮かぶ 月
いつもの遠吠え聞こえない
偽物の光が照らしだす
冷たくなつた一匹狼

一匹狼空を見た
輝く月は無かった

本物去つて浮かぶ月
吠えない狼動かない

東の空から顔だす 本物
荒野に伏す哀れな骸
慈悲と思つて浴びせた熱
残った白が輝いて

シールとレールとルールの中で

シール貼られて生きています

あの子の名前は優等生

この子の名前は劣等性

剥がしたくて挫折して

張られます挫折した優等生

剥がしたくて頑張つて

張られます頑張った劣等性

レールの上で生きています

大学進学線に乗って走ります

高卒就職線に乗って走ります

レールから外れたくて

右に逸れたら切り替えて

レールから外れたくて

左に逸れても切り替えて

ルールの中で生きています

いつか死ぬのさ人間です

人殺しません法律です

ルールの外に行きたくて

死ねない人間化物で

ルールの外に行きたくて

人殺して死刑です

ルールの中で生きています
シール貼られるルールがあつて
レール乗ってくルールがあつて

金持ちさんと貧乏さん

金持ちさんは言いました
人生は金じゃない
近くにいた貧乏さんに
ぼいと財布をあげました

貧乏さんも言いました
人生は金じゃない
少し怒りながらぷいと
財布から顔を背けました

金持ちさんふと 생각합니다
帰るためには金がある
食べていくには金がある
病気になるたら金がある

貧乏さんふと 생각합니다
金があれば食事でき
金があれば生きていける
金がないと生きていけない

貧乏さんは言いました
世界で一番金が大事
差し出され目を背けた
財布に手を伸ばします

金持ちさんも言いました
世界で一番金が大事

差し出した財布を広い
ポケットにしまつて帰りました

顔 色 心 僕

見せた事のない顔がある
怒った顔は見せたけど
笑った顔も見せたけど
見せた事のない顔がある

塗った事のない色がある
二十四色使ったけど
四十八色使ったけど
塗った事のない色がある

その顔を見せない 見ないで
きつと一步後ずさるから
その色は使わない 使えない
きつと顔を背けるから

押し固められた心がある
出てこないようにと奥に
押し込めて壁作って
押し固められた心がある

この壁は壊れない 壊さない
一生隠したままで
この心は奥へと 奥にと
更に深く押し込んで

誰にも見せない顔がある
顔の名前はなんですか

どこにも塗らない色がある
色の名前はなんですか
誰もが知らない心がある
心の名前はなんですか

普通と皮肉がメビウス

使い古されたテーマ
使い慣れた言葉の羅列
見飽きたストーリー
聞き飽きたフレーズ

定番を定番のまま
定型句を定型句で
恥ずかしげもなく
胸張って自信もって

百回聞きました
千回読みました
ありふれた百回
そこら中に千回

よくある批判を
もはや定番の独白
工夫もない皮肉を
垂れ流し 冗長

文句を文句のまま
退屈なひねくれごちる
変えられないくせに
皮肉屋気取って

百回に十回聞く
千回に百回読む

よくある十回

よくあるよ百回

好きです嫌いです

ありふれてつまらない

でも

つまらないにつまらない

本当に下らない

よくある言葉使って

つまらないと言葉遊び

よくある言葉遊びと

また廻ってよくある言葉

続き廻り

夢叶っても続く続く
目的達しても続く続く
山登っても降りる降りる

終った気になっても
僕等の人生は変わらず
それまでと同じように
死ぬまで続く続く

ああ怠惰かな 人生人生
この退屈なる 人生人生
夢の終わりに 人生人生
もはや残酷な 人生人生

人死んでも続く続く
国滅びても続く続く
僕が死んで何が終わる？

誰かの命が終わっても
この世界は何も変わらず
それまでと同じように
くるくるくるくる回ってく

変わらないのさ この世界
終らないのさ この世界
死んで生まれて 廻る世界
終わり始まる 世界世界

クラゲで心電図なシーソーは

矛盾を楽しむクラゲです

二律背反快感です

行ったり来たりの心は海で

潮引き潮満ちぷかぷかと

日常楽しむ心があつて

変化を願う心もあつて

どっちも持つてただけなのに

中途半端と指さし嘲笑

僕の心は心電図

上へ下へとゆらゆら

一本線になった時は

死ぬ時です ご臨終

一人になりたい時もある

皆といたい時もある

孤独と関わり合わせ持つ

どっちつかずと笑わないで

真ん中立つてるシーソーの

右に左にぐらぐら

バランス崩れて傾いた

その時動くよ感情が

心はクラゲで ぷかぷか

心電図な心は ゆらゆら

心はシーソー　ぐらぐら

矛盾楽しむ余裕を持つて
優柔不断の美德を胸に
右往左往でどっちに進む
心の行き先　僕は僕は

言葉遊び『停滞』

何千回もの懺悔の先に
見えた光は偽物でした
何千回もの後悔の先に
見えた景色は変わりません

僕の嘆きはそれだけで
僕の叫びはそれだけで
それ以上でも以下でもなく
言葉遊びの停滞でした

嘆きに浸って止まって
叫びに酔って止まって
前を向くのが怖いから
先に進むの怖いから

何千回もの懺悔の先に
見えるものなどありません
何千回もの後悔の先に
見える景色はそのままです

僕の嘆きのそれからを
僕の叫びのこれからを
そこではなくてその先を
言葉遊びじゃない未来を

懺悔は一回でいいから
後悔も一回でいいから

前を向くのが怖くても
先に進むの怖くても

ただ一度の懺悔を胸に
見えるものがきつとあるから
ただ一度の後悔を胸に
見える景色がきつとあるから

積み重ねた懺悔で塞がずに
降り積もった後悔で閉ざさずに
少しの嘆きをバネにして
一回叫んで前へ前へ

ただ一度の懺悔の先に
見えた光は本物です
ただ一度の後悔の先に
見えた景色が未来です

自分頼み

困った時に神頼みで
行き詰ったら神頼みで
助けて救って神様神様
十字切るか 手合わせるか

それで困らなくなつて
それで詰まらなくなつて
救われたと思うのか
助けられたと笑うのか

じゃあ なんだよ
俺の努力はいらねえのか
俺の悩みは無駄なのか
自分の力は無意味ってことか

困った時には自分じゃなく
行き詰っても自分じゃなく
助けて救って神様神様
十字切つてさ 手も合わせてさ

それは困るだろう
それはつまらないだろう
救われてんじゃねえよ
助けられてんじゃねえよ

全部 俺のものだ
俺の努力があつてこそで

たつた一人で悩みぬいて
自分の力に意味持たせて

神様いてもいいけれど

自分がいてこそその人生が良い

神様いてもいなくても

自分がいるから開ける道を

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0213w/>

歌の葉

2011年11月14日03時13分発行